

## 企画展示「近代日本の地図と書翰」に寄せて

小林 丈 広

本展は、ここ数年の間に図書館で保管するに至った地図や古文書などといった原物資料の中から、近代日本の都市構造に関わる地図や、政治や社会に関わる書簡類など、保存状態の良いものを選んで展覧に供したものである。

筆者は、本学の学生が歴史学を学ぶために、また博物館学芸員や司書などとしての実践力を養う上でも、史料の実物に触れることが大切だと考えている。そのためには、本学が少しでも多くの原物資料を収集することが必要であるが、とくに日本の近世史や近現代史に関する史料であれば、比較的廉価で入手できるものもあるので、機会を見つけて収集に努めてきた。基本的には、史学科における史料実習などで活用したいため、学科予算で収集することになっているが、個人研究費や科学研究費で収集した場合には、図書館で管理されることになる。本展を企画したのも、こうした経緯により、結果的に図書館で管理されるに至った史料が増えてきたため、展示をしてはどうかとお勧めいただいたのがきっかけであった。

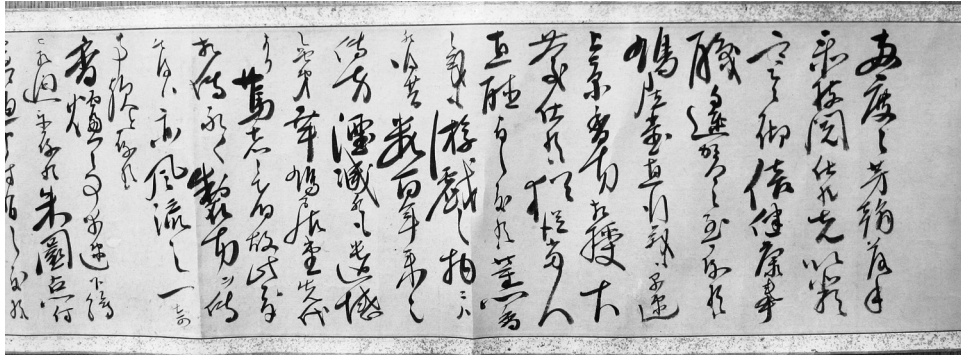
ところで、原物資料を古書店などから購入する場合には、すでに史料が何らかの事情で原所蔵者から切り離されてしまっていることを意味する。筆者は、本来ならば、こうした史料類は当該地域の公的機関が収集するのが望ましいと考えているが、近年はどの公的機関でも収集

のための予算がきわめて限られているため、実際には遠方にある国の機関や大学などが購入することが多い。そこで、本学としては、奈良やその周辺府県の地方文書（村の庄屋や戸長の文書など）などに日頃から目配りしておくことが重要な役割と考えられるが、史学科では以前より森田先生などが尽力され一定の蓄積があるので、史料実習などでも活用させていただいている。

そこで筆者の場合であるが、収集に取り組んだ期間が短いため、いまだ質量ともに到底紹介に耐えるものではない。収集にあたり、とくに対象を限定したわけではなく、たまたま知り得た情報の中から購入可能なものを選んだにすぎない。奈良関係の史料も心がけたものの、まとまった史料の収集には至らなかった。そこで本展では、必要に応じて、学科所蔵の史料も利用させていただき、なんとか開催にこぎ着けたというのが実態である。ただ、史料そのものを身近に見ることによ



展示の準備をする学生たち



榎村正直宛三条実美書簡

り、学生に原物資料への関心を高めていただくことができれば幸いである。

．．．．．

本展は、大きく分けて、地図と文書（書簡）によって構成されているが、地図を展示の冒頭にまとめたのは、19世紀の色分け図が鮮やかに保存されており、展示品として魅力があったのと、展示ケースの壁面を活用するためには、文書よりも地図の方が向いていると考えたからである。本展の準備にあたっては、日本史講読の受講生の協力を得たが、解説文の文字の大きさや展示品の高さ、湿度管理、地図を垂直の状態でも安静に保つための工夫など、壁面展示の方法を学ぶ良い機会になったものと思われる。

文書の方は、積文が一部しか準備できず、甚だ不十分なものになったが、三条実美、岩倉具視、品川弥二郎、伊藤博文、山岡鉄太郎（鉄舟）など、教科書や小説などでなじみのある人物の文字を実際に見ていただくだけでも、意義があるのではないかと考えた。

この中で、三条実美が榎村正直に宛てた書簡は、現在も京都の寺町にある筆墨香具商鳩居堂に関係する興味深いものである。

明治維新时期に鳩居堂の当主であった熊谷直孝については、以前、小文「明治維新时期の「市長」」（『奈良史学』第29号、2012年）にまとめさせていただいたが、この書簡は直孝の子直行に関するものである。小文にも書かせていただいたように、天保の飢饉の際に活躍した直恭とその子直孝

は、窮民救済や伝染病予防などの社会的活動に熱心で、とくに直孝は尊王攘夷運動など政治活動にも関与した。鳩居堂と三条実美との関係は、その頃から続いていたものと思われる。1875年（明治8）に直孝が死去すると、京都と東京でその事績を偲ぶ展覧会が開かれるが、木戸孝允も東京での催しに参加したと日記に記している。

しかし、鳩居堂が禁門の変で焼失したにもかかわらず、直孝は尊王攘夷運動への支援を続け、戊辰戦争に際しても軍資金の調達に奔走した。直孝が死去した頃には、鳩居堂は多くの借財を背負っていたと伝えられる。そこで、後を継いだ直行は、社会的活動に勧誘されることを避けるために、すぐに家を幼い直之に継がせ、直行は後見人として経営の立て直しに専念することにしたのである。また、直孝の時代には行わなかった東京への出店も決断した。鳩居堂には、ちょうどこの頃、宮中秘伝の薫香の製法が伝えられたとの伝承が残されており、その後の鳩居堂再建の支えとしたのである。この書簡は、おそらくその頃のものと思われ、三条実美と鳩居堂との関係を裏付けるものである。

この書簡の発見が、『京都新聞』に報じられたのは2009年のことであったが、その後、縁あって、本学の史学科で購入することができた。書簡は、何気ない時候の挨拶状であっても、読み込んでいけば、深い意味が隠されていることがある。それを読み解いていくことも、歴史学の醍醐味である。

## 『翰墨大全』 追跡

文学部史学科 教授 森 田 憲 司  
図書館長

博物館でも図書館でも、展示というものは、参観者のだれよりも担当者にとって有益なものである。とは、だれもが言うことだが、今回もそれを実感した。

奈良大学図書館は2012年にいくつかの古典籍貼りこみ帖を架蔵に加える機会を得て、それをご披露するための展示会を、13年の夏休みをはさんだ時期におこなった。詳しくは、展示目録を見ていただきたいが、ここでは、そのうち『古梓残葉』を準備していて気の付いたことを書き残しておきたい。

まず簡単に『古梓残葉』について紹介しておこう。この本は、書誌学の泰斗禿氏祐祥とくしゆうしょう氏が、1929年に編まれた古典籍の貼りこみ帖で、現在では貴重となった古典籍が、約40種貼りこまれている。編者によれば、この本は40冊作られたそうで、さらに、残った書物を用いて作られた別集が何冊かあるらしい。しかし、CiNiiなどで検索しても出てくるのは、本学を含めても6件と別集2件のみ。もっとも、CiNiiは大学図書館での所蔵数だから、いかに戦災などの災禍を経ているといっても、実際には個人や古書店が所蔵しているものが、このほかにあるだろう。

そして、ここで取りあげたいのは、そこに貼りこまれた『事文類聚』という本。

いささかややこしいことに、よく似た名前の本が2つある。1つは『古今事文類聚』で宋の祝穆という人が編み、元の富大用が追補したもの。もう1つは『新編古今事文類聚翰墨大全』で、やは

り元代に劉応季という人によって編まれた本。どちらも、さまざまな項目を立てて関連する文献を集めた「類書」と呼ばれるジャンルの本である。ややこしいので、ここでは後者を『翰墨大全』と呼ぶ。

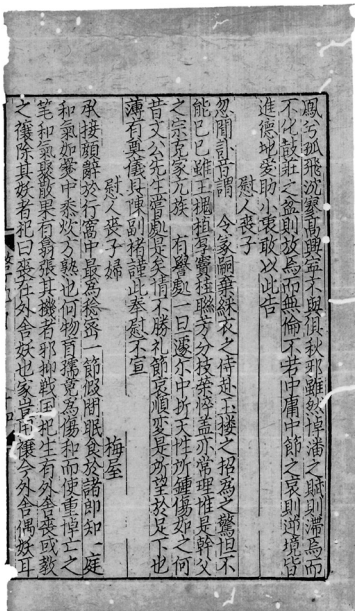
一般的には、祝穆の本のほうが有名で、朝鮮や日本でも刊行されていて、影印本が本学にもある。一方、後者には元朝の制度関係史料が多く引かれていて、私はときどきお世話になる。貼りこまれているのはこちらの方だ。禿氏さんが貼付の本を祝穆編とされているのは錯覚か。

次ページの写真上を見ていただければわかるように、本学の『古梓残葉』に貼りこまれているのは、丁集からの半葉、知人の家族が亡くなった時の哀悼状の部分である。所在確認のできている他の4点にはどこが貼りこまれているのか、また、禿氏さんは「元刊本」としか書かれていないが、元代から明代にかけて何種類か刊行された『翰墨大全』のうちどの版のものなのか。この2点が気になりはじめた。

とりあえず、京都大学文学部、佛教大学などにある『古梓残葉』を調査させていただいて、貼りこまれているのが同じ巻の他の葉であることが確認できた。あと、国会、国文学研究資料館などのものが残る。別集はまだ1つも見えていないし、そもそもそちらにも『翰墨全書』が貼られているかどうか未確認である。

もう一つの課題の、現存の『翰墨全書』のうちどの本と版が合うかについては、まだ手についた





ばかりだ。現在いちばんポピュラーな『翰墨大全』は、中国の西南師範大学出版社から出版された『明代通俗日用類書集刊』に影印された明の正統11年刊本だろう。本学にもあるので調べてみた（写真下）。しかし、同文の記事があるにはあるが、場所は戊集卷3だし、そもそも行がずれているから、同じ本ではない。

祝穆の本の方がポピュラーだとは言ったが、『翰墨大全』もそれなりの数が日本に招来されていて、「漢籍データベース」に登録されているだけでも、国内に元刊本が6点、明刊本が15点、つまり20点以上ある。今のところ、他の調査で行った機会に見ただけだが、東洋文庫の元刊本はたまたま関係部分が欠けているし、内閣文庫の本は目録にもあるとおりの明刊本で、この本とは合わない。あと5つの元刊本だけは、少なくとも確認しておきたいものだ。

こんなことにこだわって、なんの役に立つのかと問われると困ってしまうのだが、大修館書店の『中国文化史大事典』で、「古今事文類聚」の項を担当した身としては、本学の蔵する『古椋残葉』に『翰墨全書』が貼りこまれていたのは何かのご縁だと思い、追いかけているという次第。

ちなみに、『古椋残葉』には、朝鮮王朝同治年間の暦も貼りこまれている（京大文学部本も同じ）、奈良大学史学科は、縁あって朝鮮王朝時代の暦を数十冊所蔵する。まだ未整理だが、これについても、比較対象の機会を設けないといけなさと考えている。

後記

図書館報「みささぎ」第19号をお届けいたします。

まず、企画展示ならびに原稿をご執筆いただきました文学部史学科 小林丈広教授に御礼申しあげます。

小林教授は2011年に本学に着任され、学生たちへの“知”の教授をいただき、また図書館においては、展示や蔵書に関することらをご教示いただきましたが、まことに残念なことに今年度末でご退職されます。長きにわたり図書館のために色々ご尽力を賜り重ねて厚く御礼申しあげます。

また、文学部史学科 森田憲司教授（図書館長）、には、昨年度の図書館展示に多分にご協力いただき、経験をもとにこのたび、貼りこみ帖について、ご執筆いただきましたこと、御礼申しあげます。おかげをもちまして今年度も年間3回にわたり図書館報を発刊することができました。次年度も3回の発刊を予定しております。どうぞお楽しみに。（編集担当）

発行：平成26年3月10日  
編集：奈良大学図書館 奈良市山陵町1500